

## 松橋雅実

（令和二年二月号）

朝の日に出でてあゆめば柿の木の下の落葉も影ながくひく  
鋼索をよぢ登りつつ半ばにて莖葉もろともに枯るる蔓くさ  
なだれたる背高泡立草の花穂黄のとき過ぎて白くなりをり  
刈入れのあとの水路にたまりぬる水はま上の青空うつす  
日なたへと出づれば広き道に照る秋の西日のなほあたたかし  
アパートの二階の窓のそれぞれに離れて光る夕ばえの空  
日没の前のひととき紅が黒くなるまで輝くもみぢ  
雨後の川重たくながれ来る波のうへに疾風さざなみ走る

### ●作者の言葉

「詩は人の考えるように感情ではない。詩は本当は経験「なのだ」というリルケの言葉を読めば、成程その通りだと

頷くけれども、感情に奉仕するのではない歌をいざ作ろう

とすると、2月号で幸綱先生のご指摘を受けたように、先人の物の見方の範囲内で物を

見てしまったり、或いは現実を説明するだけの浅い短歌を作ってしまったりする。そこを突破する道を捜しているのが今の自分だと思えます。この度は、本当に有難うございます。もっと努力をという天の声だと受け止めました。

### ●選者の言葉

昨年七月号〜本年六月号で私が特選に選ばせて頂いたのは、計四七人。複数回選んだのは、鶴沢梢さんお一人だった。その鶴沢作のうち九月号、七月号の松本実穂作、十月号の桑野智章作、四月号の松岡秀明作と石田郁男作など力作が多くとても悩んだのだが、結果としては上に掲げたごとく、本年二月号の松橋雅実作を年間選者賞とした。

松橋さんの八首は、驚くような連作ではないかも知れない。しかしながら、言わば基本に忠実なのである。時折編集作業後の後記に『現代短歌全集』を読んでいると記されているが、その成果なのだろうか。へアアパートの二階の窓のそれぞれに離れて光る夕ばえの空」

